

ふる雪にうづもれながらたかき名の四方にかくれぬ山はふじのね
いづくよりむかふもおなじおもて／＼空にそむかぬ山はふじのね

ひさかたの空に月日をみすまるの玉とうながせるふじの山姫

天地のあしけき氣をばしら雪のよけて世をふる山はふじのね

世の中の山てふ山をかさぬとも不盡のみたけにきそひあへんやは

枝直が歌に

天のはらてるひのちかき不盡のねに今も神代の雪はのこれり

芳宜園の歌に

はこねちや神のみさかをこえきてもなほふじのねは雲井なりけり

などよきうたと人もいひあへり吾師の歌に、

こゝろあてに見し白雲はふもとにて思はぬ空にはる、不二のね

此うたさまでの秀逸ともおもはざりしにいにし文化四年、おのれ伊豆の出湯をいで、弦巻山の頂へかゝりの里なる竹村茂雄がもとへと、心ざして旅だてる頃、熱海の出湯をいで、弦巻山の頂へかゝりしに、浮雲西の空にたちかさなりたりしかば、ともなへる人にむかひて、不二はいづくの雲のあなたにか、あたりて見ゆると問ひしにはるかにゆびざして、あしこの雲のうちにこそといふほど、いつしか浮雲はれのきけるに、其指ざしをしへたる雲よりは、はるかに高く、空に聳えて、ふりあふぎ見るばかりなりしかば、さて其時ぞ師の歌をおもひ出でゝめで聞えたりき近きころ東海道名所圖會といふ書の不二のかた畫ける所に、大菅中養父の國歌八論斥非といふに、人の歌とて、心あての雪間は、麓にておもはぬ空に晴る、不二のれとあるは、師の歌によく似たり、されどいさてさかのたがひにて、いみじく歌がらのおのれは、かくいにしへ今によみ盡し來れるふじの山なれば、中々なる言葉にいひけがさんこと、いかゞとおもひて、名所山などいふ題にて、うたよむに